

1725
ト 5



芝新錢坐慶應義塾之記



慶應義塾之記

今爰ニ會社ヲ立テ義塾ヲ創メ同志諸子相共ニ講究

切磋シ以テ洋學ニ從事スルヤ事本ト私ニアラズ

ク之ヲ世ニ公ニシ士民ヲ問ハズ苟モ志アルモノヲ

シテ來學セシメンヲ欲スルナリ抑モ洋學ノ由テ真

リシ其始ヲ尋ルニ昔享保ノ頃長崎ノ譯官某等和蘭

通志ノ便ヲ計リ其國ノ書ヲ讀習ハンコトヲ訴ヘシガ

速ニ允可ヲ賜リ又即チ我邦ノ人橫行ノ文字ヲ讀習

ルノ始メナリ其後室曆明和ノ頃音木昆陽命ヲ奉シ

テ其學ヲ首唱シ又前野蘭化桂川甫周杉田鷗齋等起

リ專精シテ以テ和蘭ノ學ニ志シ相与ニ切磋シ各得

ル所アリト雖モ洋學草昧ノ世ナレハ書籍甚乏シク

昭和十五年三月一日
市島謙吉氏贈



且之ヲ學フニ師友ナケレハ遠ク長崎ノ譯官ニ就テ
其疑ヲ叩ク偶和蘭人ニ逢ハ其实ヲ質セリ蓋此人
々孰レモ英邁卓絶ノ士ナレハ只管自我作古ノ業ニ
ノミ心ヲ委子日夜研精シ寢食ヲ忘ル、ニ至レリ或
ハ傳フ蘭化翁長崎ニ往キテ和蘭語七百餘言ヲ學得
タリト是ニ由テ古人カヲ用ユルノ切ナルト其學ノ
難キトヲ察スベシ其後大概玄澤宇田川槐園等繼起
シ降テ天保弘化ノ際ニ至リ宇田川榛齋父子坪井信
道箕作阮甫杉田成郷兄弟及緒方洪庵等接踵輩出セ
リ是際ヤ読書訳文ノ法漸ク開ケ諸家繙訳ノ書陸續
世ニ出ルト雖モ概子知蘭ノ匠藉ニ止リテ旁ヲ其窮
理天文地理化學等ノ數科ニ及ノミ故ニ當時此學ヲ

称シテ蘭學ト曰ヘリ蓋是時ト雖モ通商ノ國ハ和蘭
一州ニ限り其來船スルマ唯西陲ノ一長崎ノミナレ
ハ尚書籍ノ乏キニ論ナク總テ修學ノ道甚便ナラサ
レバ未タ隔靴ノ憾ヲ免レズ然ルニ嘉永ノ季亞美理
駕人我ニ渡來シ始テ和親貿易ノ盟約ヲ結ヒ又其好
ヲ英佛魯等ノ諸國ニ通セシヨリ我邦ノ形勢終ニ一
變シ世ノ士君子皆彼國ノ事情ニ通スルノ要務タル
ヲ知り因テ百般ノ學科一時ニ真リ各其學ヲ首唱シ
生徒ヲ教育シ此ニ至リテ始テ洋學ノ名起レリ是豈
文學ノ一大進歩ナラスヤ願ヲニ一事一運ノ將ニ開
カントスルヤ進ムニ必ス漸ヲ以テス譬ハ猶樓閣
ニ上ルニ階級アルカ如シ乃チ天保弘化ノ際蘭學ノ

行ハレシハ宝曆明和ノ諸哲コレガ初階ヲ成ニ方今
洋學ノ盛ナルハ各國ノ通好ニ因ルト雖氏實ニ天保
弘化ノ諸公之カ次階ヲ成セリ然則吾黨今日ソ盛際
ニ遇フモ古人ノ賜ニ非サルヲ得ニヤ抑モ洋學ノ以
テ洋學タル所ヤ天然ニ胚胎シ物理ヲ格致シ人道ヲ
訓誨シ身世ヲ營求スルノ業ニシテ眞實無妄細大備
具セザルハ無ク人トシテ學バザル可ラサルノ要務
ナレハ之ヲ天真ノ學ト謂テ可ナランカ吾黨此學ニ
従事スル茲ニ年ヲリト雖氏僅カニ一班ヲ窺ノミニ
テ百科浩瀚常ニ望洋ノ嘆ヲ免レズ實ニ一大事業ト
稱ス可シ然レ難キヲ見テ為サルハ丈夫ノ志ニアラ
ス益アルヲ知テ眞サニルハ報國ノ義ナキニ似タリ

蓋此學ノ世ニ擴モンニハ學校ノ規律ヲ彼ニ取り生
徒ヲ教道スルヲ先務トス仍テ吾黨ノ士相与ニ謀テ
私ニ彼ノ共立學校ノ制ニ倣ヒ一小區ノ學舎ヲ設ケ
コレヲ創立ノ年號ニ取テ假ニ慶應義塾ト名ク今茲
四月某日土木切ヲ竣メ新舎ノ規律勸戒ヲ立テリ
冀クハ吾黨ノ士千里笈ヲ擔フテ此ニ集リ才ヲ育シ
智ヲ養ヒ進退必ス禮ヲ守リ交際必ス誼ヲ重シ以テ
他日世ニ濟ス者アラバ亦國家ノ為ニ小補ナキニア
ラズ且又後來此舉ニ倣ヒ益其結構ヲ大ニシ益其會
社ヲ盛ニシ以テ後來ノ吾曹ヲ視ルル猶吾曹ノ先哲
ヲ慕フカ如キヲ得ハ豈亦一大快事ナラスヤ嗚呼吾
黨ノ士協同勉勵シテ其切ヲ奏セヨ

○規則

- 一 會社人々務テ義塾ノ學問ヲ盛ニセシメテ其風習ヲ整肅ニセシメタル則チ決定スル所ノ紀律左ノ如シ
- 一 眠食都テ清潔ヲ心掛ヘシ
- 一 金銀ノ貸借ヲ禁ス
- 一 門ノ出入ハ夜九時半時ヲ限ル
- 一 夜中書讀ヲ禁ス
- 一 毎朝早起夜具ヲ片付私席ヲ掃除スベシ
- 一 戸障子壁其外銘々ソ行燈ハモ樂書一切無用タルハ

- 一 表長屋ノ窓ヨリ物ヲ買ヒ或ハ往來ノ人ト談話スベカラズ
- 一 社中ノ人ハ元來文ヲ事トスルモノナレハ何等ノ事故有トモ抜刃不致ハ勿論假令トモ其候節モ私席ニテ無用タルヘク必塾中ノ執事へ相届講堂ノ傍人ナキ處ニテ靴ヲ脱スベシ
- 一 外人へ應接ハ必ス應接ノ間ニ於テスヘシ或ハ知己學友等不得止向ハ私席へ按内イタシ不苦トイヘトモ鄰席ノ妨相成ヘクニ付遠慮スベキ事
- 一 塾中出入ノ商人等へ要用有之節ハ食堂ノ上リ口ニテ其用ヲ弁スヘシ都テ塾僕ノ外下人ハ一切塾中へ入ルベカラズ

一 講談會讀素読一切講堂ニ於テシ私席ハハ可成大
 互ニ近スタコトナカルベシ
 一 講堂ノ掃除ハ三人ヲ一組トシ一週日ノ間是ヲ引
 受終レハ次ノ組合ニテ又一週日ヲ引受ベシ
 但講堂ノ掃除トハ毎朝拂曉ニ窓戸ヲ開キ塵拂
 ニテ障子其外ヲハ夕キ帚ニテハキイ夕ニ晩ハ
 又窓戸ヲ閉スル事ナリ掃側其外ヲ拭フ事ハ塾
 僕職分ナリ
 一 外人應接ノ為毎日一人ツ、順番ヲ立應接ノ間ニ
 テ書ヲ読ミ傍ニ其用ヲ便スヘシ
 一 會讀講義素読終レハ直ニ掃除スベシ但此掃除ハ
 一 外来ノ社中ニテ引受ベシ

右之條々相好若シ不便イ事アラハ互ニ高議シテ
 レヲ改ムベシ

○食堂規則

一 食事ハ朝第ハ時昼第ハ二時夕第ハ五時ト定ム
 但シ日ノ長短ニ從テ次第ニ其差アルベシ
 一 食事ノ報告第一拆ヲ聞テ各用意シ第二拆ヲ聞テ
 食椅ニ就キ第三拆ヨリ食終ルマテ西洋一時ヲ限
 トス此期限ニ後ル者ハ其次第ヲ食堂監ヘ申出
 ベシ但シ期ニ後レテ食スル者ハ食後自分ニテ掃
 除スベシ
 此掃除トハ自分ノ用ヒシ食椅先ニ其邊ノ汚穢

ヲ拂ヒフキンニテ拭フ事ナリ

一 自席ニテ飲食スルヲ禁ス飲食ノ器ヲモ坐右ニ置ベカラズ

一 三度常食ノ外私ニ食堂ニテ飲食スルモノハ必其跡ヲ掃除スベシ

一 日曜日ハ業ヲ休ミ午後弟ニ時ヨリ食堂ニテ飲食勝手次第但シ大酒ヲ用ヒ妄ニ大声ヲ發スルハ嚴禁ナリ

一 食椅ヲ食堂外ヘ持出シ或ハ他ノ用ニ供スベカラズ但シ讀書正坐ニ倦ミ暫食椅上ニテ書ヲ讀ム事ハ不禁

一 午後晚食後ハ木ノボリ玉遊等ビムナスヲシテノ法

一 從ヒ種々ノ戲イタシ勉テ身躰ヲ運動スミ之右之條々相守若シ不便ノ事アラハ互ニ商議シテ是ヲ改メベシ

○入社規則

一 會社ニ入ル者ハ其式トシテ金壹兩可相納事

一 入塾之節ハ塾僕へ金貳朱可遺事

一 外宿之社中ハ毎月金貳朱宛可相納事

一 入塾之證人ハ本人在塾中其一身之事故悉シ可引受事

慶應四年戊辰四月

慶應義塾同社

○日課

一 經濟書講義

キランド氏

火曜日 木曜日 土曜日

朝 第十時ヨリ

福澤 諭吉

○ 合衆國歴史講義

クアッケンボス氏

月曜日 水曜日 金曜日

朝 第十時ヨリ

小幡 篤次郎

○ 窮理書講義

同

月曜日 木曜日

午後 第一時ヨリ

村上 辰次郎

○ 萬國歴史會讀

バルレイ氏 コモンスタク

火曜日 金曜日

午後 第一時ヨリ

小幡 甚三郎

○ 窮理書會讀

クアッケンボス氏

水曜日 土曜日

午後 第一時ヨリ

永嶋 貞次郎

一人 身窮理書會讀

コラミンジ氏

松山 棟庵

○ 地理書素讀

コルチル氏 ハイスクール

月曜日 木曜日

午後 第一時ヨリ

小幡 篤次郎

○ 萬國歴史素讀

ハイトルバルレイ氏

日曜日 / 外 毎日

朝 第九時ヨリ

永嶋 貞次郎

○ 窮理初歩

スミス氏

日曜日 / 外 毎日

朝 第九時ヨリ

村上 辰次郎

○ 文典素讀

日曜日 / 外 毎日

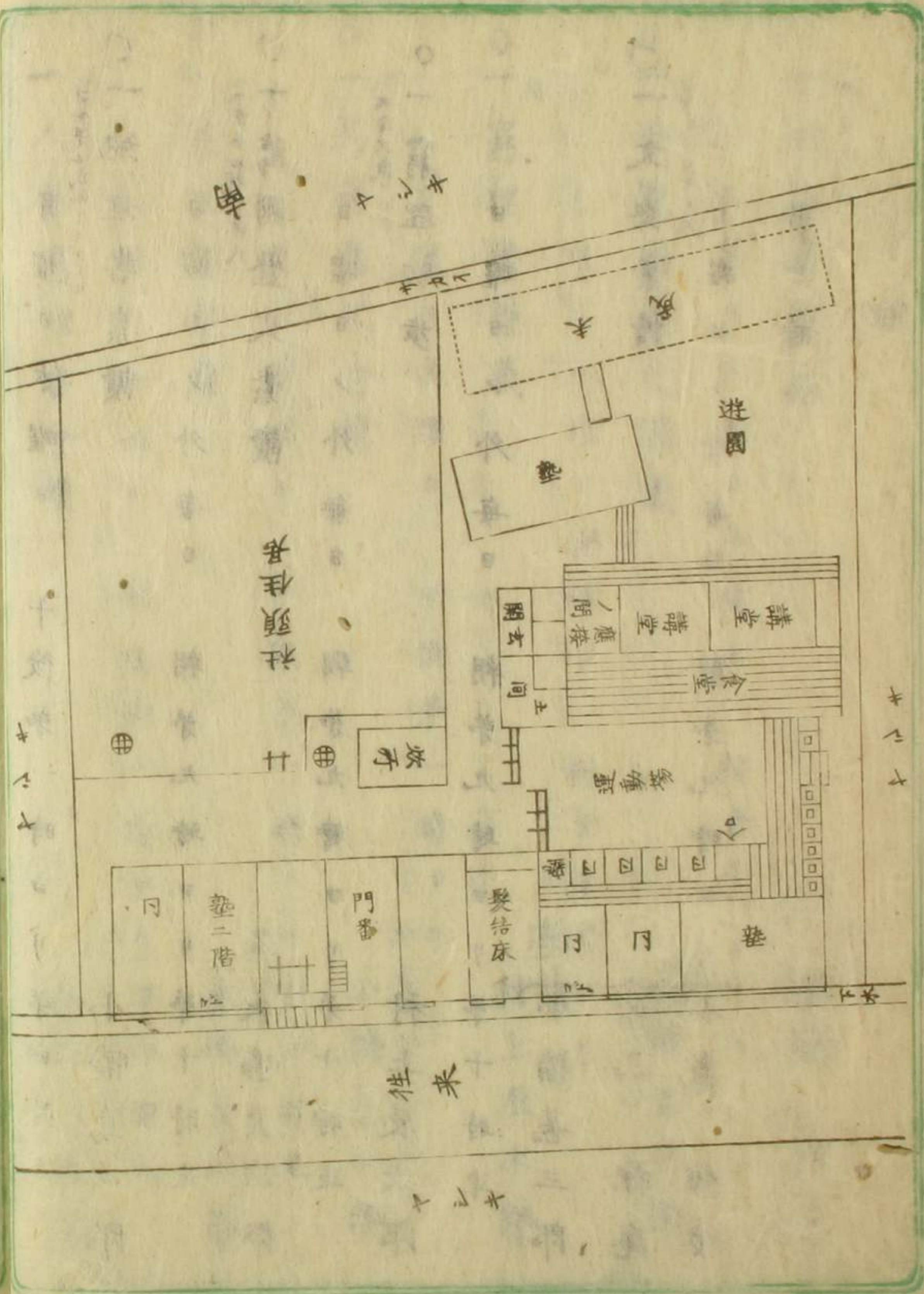
朝 第九時ヨリ

小泉 信吉

第十時迄

西洋事情外篇 初卷 云ハルイアリ人若シ其天典
 ノ才力ヲ活用スルニ當テ心身ノ自由ヲ得サレハ才
 力共ニ用ヲ為サズ故ニ世界中何等ノ國ヲ論セス何
 等ノ人種タルヲ問ハズ以テ自カラ其身体ヲ自由ニ
 スルハ天道ノ法則ナリ即チ人ハ其人ノ人ニシテ猶
 天下ハ天下ノ天下ナリト云フカ如シ其生ルハ東
 縛セラルルハナク天ヨリ附與セラレタル自主自由
 ノ通義ハ賣ル可ラス亦買フ可ラス人トシテ其行ヲ
 正フニ他ノ妨ヲ為スニ非サレハ云々トシテ其行ヲ
 春來國事多端遂ニ干戈ヲ動カスニ至リ帷幄ノ士ハ
 丙ニ焦慮シ干役ノ兵ハ外ニ曝骨シ人情恟々延テ今

中元祝酒之記



目ニ至ル於是世ノ士君子或ハ筆ヲ投テ戎軒ヲ事ト
スルアリ或ハ一書生クルヲ倦テ百夫ノ長タラント
スルアリ或ハ農ヲ廢シテ兵タル者アリ商ヲ轉シテ
士タル者アリ士ヲ忤テ商ヲ營ム者アリ事緒紛紜物
論喋々亦文事ヲ顧ルニ遑アラズ嗚呼是革命ノ世ニ
道ル可ヲサルノ事変ナル可キノ此際ニ當テ獨我
義塾同社ノ士固ク舊物ヲ守テ志業ヲ変ゼズ其好ム
所ノ書ヲ讀ミ其尊フ所ノ道ヲ修メ日夜茲ニ講究シ
起居常時ニ異ナル日ナレ以テ悠然世ト相居テ遠近
内外ノ新聞ノ如キモコレヲ聞クヲ好マス唯自信レ
自樂ミ其道ヲ達スルニ汲々タレハ人亦コレニ告ル
新聞ヲ以テスル者少ク世間ノ情態亦何様タルヲ

知ラス社中自ラ此塾ヲ評シテ天下ノ一桃源ト稱レ
其景況全ク世ト相反スルニ似タリ然リト虽モヨク
事理ヲ評シ其由ル所其安スル所ヲ視察セハ人各其
才ニ所長アリ其志ニ所好アリ所好ハ必ス長ニ所長
ハ必ス好ム今天下ノ士君子專ラ世事ニ鞅掌シ干城
ノ業ヲ事トスルモ或ハ止テ得サルニ出ルト虽モ自
ラ其所長所好ナカラサルヲ得ス故ニ彼ノ士君子モ
天典ノ自由ヲ得テ其素志ヲ施スモノト云フ可シ又
我黨ノ士幽窓ノ下ニ居テ秋夜月光ニ講究スル日
日ニ異ナル日ナキヲ得テ修心開知ノ道ヲ樂ミ私ニ
濟世ノ一班ヲ達スルハ豈亦天典ノ自由ヲ得ルモノ
ト云サル可ケンヤ然ハ則チ我輩ノ所業其敢ハ世情

ト相反スルニ似タリト虽其其实ハ共ニ天道ハ法則
ニ從テ天賦ノ才カヲ用ユルノ外ナラハレハ共彼ノ
間毫モ相戾ル丁ナシ前日ノ事既ニ已ニ斯ノ如シ後
日ノ事亦將ニ斯ノ如クナルヘケレハ我黨ノ士自ラ
阿ラス自ラ曲ケス已ニ誇ル丁ナク人ヲ卑ム丁ナク
夙夜業ヲ勉テ天ノ我ニ興フル所ノモノヲ慢ニスル
丁ナクシハ豈唯社中ノ慶ノミナラン抑モ天ノ共文
ヲ喪サケルノ深意ナル可シ本日遇中元同社手カラ
酒肴ヲ調理シ一杯ヲ奉テ文運ノ地ニ墜サルヲ祝ス

慶應四年戊辰七月

慶應義塾同社誌

